

知恵史上におけるソクラテス（その四）

北 畠 知 量

第四章 ソクラテスの知恵

はじめに

I ソクラテスの世間的印象

II 超人間的な知恵とソクラテス

III ソクラテスの知恵

〔1〕 無知の知

〔2〕 内から生起した知恵

〔3〕 生き方についての知恵

結語

## はじめに

ソフィスト達が華々しい活躍をしていた頃、ソプロニスユスの息子のソクラテスという人物が次第に人々に知られるようになってきた。

このソクラテスが四十才を迎える少し前、ソクラテスの熱心な信奉者であるカイレポンは、「ソクラテス以上の賢者はおらぬ」というアポロンの託宣を彼の許へもたらしたのである。ここにソクラテスは、神によって最も知恵ある人間と認定されることになったわけであるが、その知恵とは、一体どのような性質のものであろうか。

## I ソクラテスの世間的印象

ソクラテスは風変わりな人物であった。彼には、神からの知らせ、もしくは鬼神からの合図といったものがしばしば起こった。また彼は、突然何かに熱中して忘我状態になることがあった。彼は定職を持たず、生活は質素でいつも裸足であった。また身体は頑健で酒に強く寒さによく耐え並はずれて勇敢であった。<sup>(1)</sup>

このように彼は様々な特色を持つ人物であったが、その中でも彼の知恵は世間の人々に強い印象を与えるものであった。この点について、アルキピアデスは次のように語っている。

……この人の語ることもまた、扉が両方に開かれるあのシレノスどもにこの上なく似ているのだ。……なぜならこの人の話すことは、荷驢馬や、どこかの鍛冶屋、靴屋、鞆皮屋なめしがわであり、そしていつも同じ言葉で同じことを言っているように思われる。だから、勝手を知らぬ愚かな者は例外なく彼の話をあざ笑うことになるだろう。ところが、たまたまその扉が両方に開かれるところを誰かが見かけて、その中に入り込むならば、まず第一に、世にある言論のうちでただ彼のだけが、内に知性をもっていることに、その人は気づくだろう。ついで、それがこの上なく神々しい言論であり、徳の神像を最も多くその体内に持ち、理想的な人間になろうとする者が探求するにふさわしい対象の大部分に向っている、いやむしろ、その全体にわたっていることに、気づくだろう。<sup>(2)</sup>

この言葉からもわかるように、ソクラテスは、まさにその知的卓越性の故に、次第にアテナイの人々に、更に諸国の知識人達に、その名を知られるようになっていったのである。そしてこのことは、彼の三十代後半の頃にまでさかのぼってみることができる。

例えば前四三二〜三年頃に時代設定された対話篇『プロタゴラス』において、ソクラテスは有名なソフィスト達と互いにうちとけて、和気あいあいと対話しているのであるが、この点に着目するならば、三十六才頃のソクラテスは、すでに彼ら一同と個人的に熟知の間柄であるほどの知者であったということになる。<sup>(3)</sup> また、ソクラテスと他

国の知識人との交際は、ペロポネソス戦争の期間中（すなわちソクラテスが四十才〜六十六才の期間中）は不可能な状態にあったはずであり、この戦争が終結した時に各地のピタゴラス派の年長の知識人達がソクラテスに面会に来たことが知られるのであるが、このようなことが現実起こり得るためには、ソクラテスは四十才以前の頃から既に彼等の間で有名でなければならなかったはずである。これら二つの事からも、ソクラテスは三十代の半ばにして既に知者の誉れ高かったことが知られるであろう。

それから四十代半ばに到る間に、ソクラテスの名は更に一般の人々にまで知られるようになった。このことは、彼が四十六才の時に上演されたアリストパネスの喜劇『雲』が傍証するところである。この劇のはじめのところに主人公である田舎紳士のストレプシアデスが弁論術を習いにソクラテスの学校にやってくるシーンがあるが、このような筋書きが無理なく一般の観客に受け入れられるためには、現実のソクラテスが弁論術やその他の学識の点で既に有名な人物となっており、その名がストレプシアデスのような田舎の人にまで知られていたと考える方が自然だからである。

この喜劇は、既に有名であったソクラテスの名を更に有名なものとしたが、同時にこの劇によって多くの人々は「ソクラテスというやつがいるけれども、これは空中のことを思案したり、地下のいっさいをしらべあげたり、弱い議論を強弁したりする、一種妙な知恵をもっているやつなのだ」という見方をするようになっていったのである。<sup>(6)</sup>\*

\* 『雲』のソクラテスは、自然の研究者であり、弁論術の教師であり、また産婆術を駆使する思案の人であり、プロンテステイリオンの長である等々と茶化されているのであるが、アリストパネスはなぜソク

ラテスをこのように描いたのであるうか。この点に関して次のような見方がなされている。

(1) 保守的な立場に立っていたアリストパネスは、アテナイに台頭してきた知識人をにがしがしく思っており、このような連中こそがアテナイの伝統的な価値や信念を腐敗させているのだと考えていた。このような考えにとりつかれていたアリストパネスは、ソフィストとソクラテスとを区別することさえ出来ず、反知識人キャンペーンのための作品『雲』を仕上げる過程で、所謂自然学者とソフィストとソクラテスとを一まとめにしてしまったのである。cf. H. J. Perkinson: *Since Socrates*, p. 7.

(2) アリストパネスがソクラテスを茶化したのは、まったくの面白半分であり、ソクラテス自身もこのことは十分に承知していた。だからこそ、『雲』上演の八年後にアガトン邸で開かれたシンポジオンにアリストパネスとソクラテスは仲良く列席しているのだ。『弁明』の中でソクラテスは、自分に対する中傷がアリストパネスに由来していると述べているのは確かであるが、ここでソクラテスが、ある喜劇作者(アリストパネス)と「嫉妬にかられて中傷のために」人々をあざむいた連中とを区別している点が重要である。このことは、ソクラテスの気心を知りぬいたアリストパネスが、単に面白分に彼を茶化したにすぎないことを裏付けているからである。cf. A. E. Taylor: *Socrates*, p. 102—3.

(3) 『雲』に描かれたソクラテス像こそが、最も純粹かつ本質的なソクラテスの姿に他ならないという見方がある。例えばキルケゴールによると、ソクラテスを常識の次元で弁明して、そのイロニーを無視することになったクセノポンのソクラテス解釈と、ソクラテスを一定のイデーの持主とすることで、そのイロニーに過剰なものを付け加えたプラトンのソクラテス解釈は、ともに誤りである。むしろ、キルケゴールは、無限的かつ絶対的な否定性としてのソクラテスのイロニーが、実生活のリアルな肯定性との関係においては滑稽なものにならないと考へ、ソクラテスを喜劇的に取り扱ったアリストパネスこそが、ソクラテスを純粹にとらえ、それにふさわしく遇したものと評価するのである。キルケゴール『イロニーの概念』著作集20・21巻 白水社。なお以上の点は同書の訳者 飯島宗亨に負っている。以上のような諸例からもわかるように、アリストパネスはソクラテスの本当の姿を十分に知っていたとも、まるで知らなかったとも解されているのである。しかしながら、アテナイの法廷におけるソクラテスの弁明は、まず自分に対する中傷がどうして生じたのかという点から始まっており、しかも『雲』

に描かれているソクラテス像と、ソクラテスに対する一般の人々の見方とがほぼ一致するという点から考えた場合、この作品が一因となって、ソクラテスに対する中傷が生み出されていったということは確実である。

このようなソクラテス像は、勿論中傷と誤解に基づくものであった。『弁明』に登場するソクラテスは、このような中傷と誤解の由来を説明しつつ、自分が有名になったのは、自分が確かにある種の知恵を有していたからであるが、それは人間なみの知恵でしかないのだと述べている。

……アテナイ人諸君、わたしがこの名前（知者）を得ているのは、とにかく、あるひとつの知恵をもっているからだということには、まちがいないのです。すると、それはいったい、どういう種類の知恵でしょうか。たぶん、それは人間なみの知恵なのでしょう。なぜなら、実際にわたしがもっているものとしては、おそらくそういう知恵しかないでしょうからね。これに反して、わたしが今しがたお話ししていた人たち（ソフィスト達）というのは、たぶん、何か人間なみ以上の知恵をもつ、知者なのかも知れません。それとも、何と云ったらいでしょうか、わたしにはわからない。なぜなら、とにかくわたしは、そういう知恵を心得てはいないからです。<sup>(6)</sup>

これに続けてソクラテスはカイレポンの一件をもち出し、自分の知恵がどんな知恵であるのかを説明していくの

であるが、その説明は、二通りの方向でなされ得る可能性があったと思われる。

その一つは、超人間的な様々な知恵と比較した場合に、彼の人間なみの知恵とは一体どんな特色を有するものであったかという説明であり、その二は、人間なみの様々な知恵の中で、ソクラテスの知恵の特殊性とは如何なるものであったかという説明である。

『弁明』に見られるのは、後者の説明だけであり、前者に関しては何も触れられていない。そしてソクラテスは、そのような超人間的知恵を自分は心得ていないと言うばかりである。

だが、『雲』のソクラテスを見た人々は、あるいは実際にはソクラテスの人間吟味を受けたことのある人々は、彼がそのような超人間的知恵と無縁な人物であるとは思えなかったはずである。このような超人間的知恵をソクラテス自身は一体どのように評価していたのであろうか。

## Ⅱ 超人間的な知恵とソクラテス

ソクラテスの知恵は、一昔前の賢人達や自然の研究に従事した哲学者やソフィスト達の知恵とは異なっていた。この点に関してソクラテスは、彼等の知恵が超人間的な知恵であるのに対して、自分の知恵は人間なみのものではないと告白しているからである。だが、ソクラテスは、はたして本当に自分の知恵を卑下してこのような告白したのであろうか。この点を各々の場合に則して検討してみよう。

まず第一にソフィストの知恵に関して言えば、これをソクラテスが人間なみ以上の知恵だと評したのは明らかに皮肉である。このことを裏づける箇所は、プラトン著作の随所に見い出されるからである。

例えば『プロタゴラス』に登場するソクラテスがヒッポクラテスに対して「ソフィストが、ちょうど身体の糧食をあきなう卸商人や小売商人と同じように、自分の売りものをほめたてて、われわれをだますことのないように、気をつけたほうがいいよ」と忠告している箇所もその一つである。

また『ゴルギアス』に登場するソクラテスは、弁論術を定義せよと要求するポロスに対して、「本当のことを言うのは、少し失礼なことになりはしまいかね。というのは、ゴルギアスさんのために、言うのが憚られるからだ。つまり、この人の仕事をほくは茶化そうとしているのだと、そう思われるのではないかとね」と前置きした上で、次のように言うのである。すなわち——身体を本当によくする技術としては体育術と医術があり、その下には、この身体が単に良い状態であると思わせるだけの迎合の術として料理法や化粧法がある。これと同様に、魂が最善であるようにこれを世話する技術（立法術と司法術）の下にも、ソフィストの術と弁論の術という迎合の術がある。これらの迎合の術は、「最善ということにはまるっきり考慮を払わずに、そのときどきの一番快いことを餌にして、無知な人びとを釣り、これをすっかり欺きながら、自分こそ一番値打ちのあるものだと思わせている」のである。従って、このような迎合の術は「機を見るのに敏で、押しがよくて、生まれつき人びととつき合うのが上手な精神の持ち主が、行なうところの仕事」に他ならず、それは劣悪で醜いものである——。この箇所からも、ソクラテスが弁論術やソフィストの術をまったく評価していなかったということが裏づけられよう。<sup>(8)</sup>



以上のことから、ソクラテスがソフィストの知恵を「人間なみ以上の知恵」だと評価したのは、まったく皮肉であったということが明らかである。結局ソクラテスは、何のための弁論であり、何のための説得であるのかという問題が常にあいまいなまま放置され、魂にとって最善とは何かということが何等考慮されていないが故にソフィストの知恵は劣悪だと評するのである。

第二に、哲学者達の知恵に関してはどうであろうか。

ソクラテス以前の哲学者達は、諸現象を成り立たせている究極的な原因・根拠を求めて自然の研究 *Physis* に従事した。『バイドン』に登場する若いソクラテスはこの研究のすゝに感心し、これに熱中しながらも、結局自分は「この種の研究にはまったくお話しにならないほど生来不向きな人間」であることを自覚せざるを得なかったと告白している。<sup>(9)</sup> このソクラテスは、その後アナクサゴラスのヌース原因説に希望を見出しながらも、間もなくこれと決別し、更にイデア原因説へと思索の歩を進めていったと回想するのである。\*

\* 『バイドン』がプラトンの中期の作品であることから当然予想される事態であるが、ここに登場するソクラテスがプラトンの思想の着色を受けていることは誰の目にも明らかである。『メモラビア』等と対照させて考えた場合、ほぼ信頼出来ることは、ソクラテスが自然の研究に従事したことがあり、それも相当に熱心であったということくらいであろう。

この回想談からプラトンの着色を差し引いて考えた場合、現実のソクラテスは、おそらく自然の研究——更に限定すれば、原因・根拠についての探究——に強い関心を示しながらも、アナクサゴラスをはじめとする様々な哲

学者達の説に満足出来なかつたという点までは、ほぼ確實である。つまりここには、この種の研究のすごさは認めつつも、自然科学的な諸現象の説明や、原因・根拠を探究する場合の方法論に関しては、どこまでも懐疑的な態度を表明し続けるソクラテスの姿が描かれているのである。

これに対して『ソクラテスの想い出』の方には、自然の研究そのものに対して批判的な結論を下してしまったソクラテスの姿が描かれている。クセノポンは次のように記しているからである。

ソクラテス

彼は「万有の性質」についても、他の多くの人々のようにこれを論議することを欲せず、学者輩のいわゆ

る「宇宙」<sup>コスモス</sup>の性質を問うたり、個々の天界現象を支配する必然をたずねたりすることなく、かえってこうし

た問題を詮索する人間の言語道断を指した。第一に彼は、この連中が人間学はもはや完全に知りつくしたと考へてかような問題の詮索に移るのであるか、それとも人間のことはそのままにして神界の事に憂身をやつし、人の本分を尽したと思つているのであるかを問うた。さらに彼は、この人々にはこうした事が人間に発見不可能であることが、わかつていないのだろうかと思議がった。——中略——彼はまたこの人々についてさらに問う、人間の性質を研究する者たちは、彼らの学び知った所を、やがて己れならびに他人のために用いて、その希う所を行なわんと考へるごとく、神的事象を探究する者たちも、一旦これらがいかなる必然によつて生じたのかを知つたときには、これによつて望みのままに、風や水や季節や、その他何であれ、必要を感じる物を生じさせようとするのであるか。それともかようなことは望むのでなく、ただこれら

各々の事象の原因を知りさえすれば足るのであるかと。<sup>(10)</sup>

また、同書に登場するソクラテスは、幾何学や天文学や算法や健康法等々に通じることを奨励しているが、それはあくまでも実用の範囲内でなされるべきであり、特に幾何学や天文学の研究で一生を費すことは、他の有用な学問をさまたげる点で有害であり、また神々の領分を犯すことにもなると説いている。つまりこのソクラテスは、実用のレベルをこえるような自然学の諸問題に関しては、これを神の御手にゆだねよと説いているのである。\*

\* 『想い出』に登場するソクラテスは、次のように述べている。自然の諸現象や人間の感覚器官、この世の生物等々の一切は、慈愛に満ちた神が人間のために整えて下さったものである。森羅万象を整然と統一維持しているのは神の力なのである。このことをよく認識し、神靈を敬うべし……。Mem. I. 4

このように、自然の研究に対するソクラテスの態度は、『バイドン』と『ソクラテスの想い出』とは、——更  
に言えば、プラトンの描くソクラテスとクセノポンのそれとでは——かなりくい違っている。前者の場合は懐疑的  
なだけであるが、後者の場合は自然の研究それ自体を否定しており、この種の研究に従事する人々の愚かさを糾弾  
するに到っているからである。しかしながらソクラテスがこの種の研究に納得していないという点は両者に共通し  
ており、このことから推察してみると、彼が哲学者の知恵を高く評価していたとは考えにくいことになる。

『ソクラテスの想い出』の場合ははっきりしているので、プラトンの著作に登場するソクラテスがこの種の知恵  
に関してどのような見解を表明しているかに絞って見てみると、やや注目に値すると思われる箇所が二、三見い出

せる。

その一つは、『弁明』に登場するソクラテスが、『雲』に描かれている自分について釈明する下りである。ソクラテスは言う。『雲』の中で自分は、天上地下の事柄を探究する一種奇妙な知恵の持主として描かれており、この点に関して自分はまるで理解が出来ないが、「もし誰か、こういう事柄について、特別の知恵をもっている者があるのなら、そういうような知恵を軽蔑する意味で、わたしはこんなことを言っているのではない」のだ、と。<sup>(4)</sup>

この部分を素朴に読むと、ソクラテスは哲学者の知恵を否定してはいないと思いたくなる。しかしながらこれは「もし……ならば」という仮定の上に立った見解であり、ソクラテスはここで、この種の知恵を認めると言っているわけではない。

その二は、パルメニデスに対する評価である。『テアイテトス』に登場するソクラテスは、自分はごく若い頃にパルメニデスに会ったことがあるが、「あの人は、私の見るところでは、ホメロスのいわゆる人畏敬すべく、また畏怖すべき人Vという感じがするのです。……そして私には、あの人はあらゆる点で高貴な、何か底知れないものをもっているように見えたのです」と述べているからである。<sup>(5)</sup>

しかしながら、ごく若いソクラテスが高齢のパルメニデスと会見し得たということは、きわめて疑わしい。これはプラトンの創作であるかも知れない。仮にこれが事実であるとすれば、ソクラテスはパルメニデスを高く評価したことになるわけであるが、その場合でもこの評価は、パルメニデスの人格に対してのものであって、彼の自然研究の業績に対してなされたものではない。\*

\* 研究業績が評価されている唯一の例は、ヘラクレイトスの場合である。ディオゲネス・ラエルティオスによると、ソクラテスはヘラクレイトスの書物について「わかったところはすばらしい。だが、わからないところもきつとそうだろうと思う。ただいかにせんその底を探るには熟練したデロスの潜水夫の腕前が必要だ」と評しているからである。だが、どのような点が評価されたのか、これだけでは不明である。

このような例から考えてみると、プラトンの著作に登場するソクラテスも、哲学者の知恵に対しては否定的な評価しかなかったと見た方がよいであろう。

以上のことから、ソクラテスは、自然の研究に従事した哲学者の知恵については——すなわち、ある一定の原因・根拠から諸現象を説明しようとする企てや、そのような原因・根拠を探究する方途（方法論）や、その種の研究の有効性については——消極的で否定的な評価しかしていないと言えよう。

最後に、一昔前の賢人達の知恵に関してはどうか。

ここで一昔前の賢人達というのは、狭く限定すれば七賢人に数えられるような人々であるが、ややその範囲を広げて考えるならば、一昔前のオルペウス教徒やピタゴラスの徒 *Pythagoreos* に属する人々を挙げることが出来るし、更に言えば神官や神的な詩人あるいはディオティマのような人物を挙げることも出来る。このような人々の知恵を、ソクラテスは一体どのように評していたか、これを具体的な記述に即して見てみよう。

『メノン』に登場するソクラテスは、学習＝想起説を導き出す論拠として「魂の不死」という神秘的な観念を提出するのであるが、これを自分は「神々の事柄について知恵をもった男や女の人たち」「神職にある男の人や女の人

人たちのなかでも、自分のたずさわる事柄について説明を与えることが出来るように心がけている人々」から聞いた話である。と述べている。<sup>(13)</sup>

また『饗宴』に登場するソクラテスは、エロースに関する議論がアポリアに陥りかけたとき、マンティネイアの婦人ディオティマから授けられたエロースに関する言説を披露していくのであるが、その際ソクラテスは人々に、このディオティマのことを「この女は恋のこともほかの多くの事柄でも、みなその道の知者であって、例の疫病に先立ちアテナイの人々に犠牲式を挙げさせることによって、彼等のためにその病気の来襲を十年先に持ち越させたものだ。そしてほかならぬこの婦人がまた、ぼくに恋愛道を教えてくれたのだ」と紹介している。<sup>(14)</sup>

以上のわずか二例からもうかがい知れることであるが、ここに登場するソクラテスは、対話が行き詰まりになるような局面を迎えると、これまでに行なってきた議論の次元を引き上げるような、新しい考えを提起する。そしてこの考えを自分は賢人達から得たのだと説明するのである。このようなストーリー展開をそのまま受けとめるならば、ソクラテスは賢人と呼ばれ得るような人々の言説に深い尊敬の念を抱いており、これらの言説が、人々との対話の過程でしばしば用いられていたのではないかと考えてみたくなる。

しかしながらこのようなストーリー展開は、アポリアでもって終了する初期対話篇とはいささか趣きが異なっている。またここでソクラテスが紹介している賢人達の考えは、多分にプラトンの（もしくはオルペウス・ピタゴラス的）な色彩を帯びていることも確かである。

著作年代から考えると、『メノン』はまさにプラトンの独自の思想が現われ始める作品、また『饗宴』はそれが

ある程度進んだ作品であり、先に引用した部分——ソクラテスが賢人に言及している数少ない部分——は、いずれもプラトンの思想が、はじめはおそるおそる、そして後にはこれが次第に大胆に表明されていく段階を物語つていると受けとることが出来る。つまり、プラトンは、師ソクラテスの思想的枠組を踏み越えて彼独自の思想を提起しようとする際に、何等かの権威によって己れの自信のなさを補う必要から、このような賢人達の言説を持ち出したのであろう。そして彼は、ソクラテスの死後、師の思想的枠組を越えるような彼独自の思想を構築していったわけであるが、その際は、自分の思想と師ソクラテスのそれとの連続性を強調するために、これらの言説をソクラテスに語らせたのであろう。\*

\* プラトンがどれほどソクラテスの思想的枠組から逸脱したとはいえ、事実無根の事柄を作品に仕上げることは出来なかつたはずである。ソクラテスがこれらの賢人達を敬愛し高く評価していたという事実があったればこそ、プラトンはこれを作品の素材として利用し得たのだと推測してみることも出来る。だがこれは、あくまでも推測でしかない。

このように考えてくると、現実のソクラテスがこれら賢人達に対してどのような評価をしていたのかは、全く不明だということになってくる。しかしながら、資料による実証的裏づけという点を念頭に置くならば、この問題は不明だと言うのが最も正しい判断であろう。なぜならソクラテスは、これら賢人達に対する断定的な評価を留保しているからである。

このことを示す記述が『弁明』の中にある。死刑の判決を受けたソクラテスは、自分の死後の生活を展望し、ミ

ノス、ラダマンテュス、アイアコス、トリプトレモスなど公正で敬虔な一生を送った人々、あるいはオルペウス、ムウサイオスなどの伝説上の詩人、ヘシオドスやホメロスのような神的な詩人の名を挙げた後、次のように述べているからである。

またそのうえ最大の楽しみとしては、かの世の人たちを、この世の者と同様に、誰が彼等のうちの知者であり、誰が知者と思つてはいるがそうではないか、と吟味し、検査して暮らすということがあるのです。……

そういう人たちをもし、人が吟味できるとしたならば、それを自分でするために、どれほどのものを支払うことでしょうか。それらの人たちと、かの世において問答し、親しく交わり、吟味することとは、はかり知れない幸福となるでしょう。<sup>(45)</sup>

この一節からも明らかのように、あらゆる人がソクラテスの吟味の対象になっている。一昔前の賢人達といえども例外ではない。そしてソクラテスがこれらの賢者を直接に吟味していない以上、彼等に対する評価は留保されたままということになる。

しかしながら、この問題がこれで行き詰まったわけではない。この留保の一步先を、別の資料によって推測してみることが可能だからである。その場合、次のように考えるのが最も妥当であろう。

賢人達は、神々の意向を伺い、悪しき運命を招かぬように配慮し、よりよく生きるための教説や指針を人々に教



示することが出来た。このようなことが可能であったのは、賢人達の知恵が神々からの賜物であり、神々の知恵につながるような性質のものであったからである。だが、ソクラテスは、自分以上の賢者はおらぬというアポロンの神託を受けた後、人間の知恵の最高の姿は、無知を知ることであるという信念を得た。従って、彼にあっては、人間の知恵と神の知恵との間には明らかな断絶が想定されていたということになる。その上で彼は、人々の間で取りざたされているような神的知恵や、神話に対しては、否定的な見解を表明するのである。

一例をあげるならば、ゼウスが自分の父神であるクロノスを縛ったという神話について語るエウチュプロンに対して、ソクラテスは「ひとが神々についてそういった話をするたびに、ぼくがどうも氣むずかしく、それをなかなか受け入れようとしなない」ことで、自分は公訴されたのかも知れないと応答し、これに続けて「だって、それらの事柄については何一つ知らないと自分でも認めているような我々に、何をまた主張することができようか。……ほんとうに君は、そんなことが事実その通りに起こったと考えているのかね？」と反問しているのもその一つである。<sup>(10)</sup> このように考えてみると、賢人といえども人間である以上、ソクラテスは彼等の知恵を神々の知恵に比類しうるものとはみなしていなかったと解した方がよさそうである。

結局これらの賢人達の知恵に対する敬意も、ソクラテスの皮肉と見た方が確かであるように思われる。

以上の考察から、ソクラテスは、一昔前の賢人や自然の研究に従事した哲学者やソフィストの知恵を、表向きは尊敬しているようにふるまっているが、決してこれを本心から尊敬しているわけではないということが明らかとなる。また、自分の知恵は彼等のような超人間的なものではないというソクラテスの告白も、彼一流の皮肉であると

ということが確認される。

### Ⅲ ソクラテスの知恵

#### 〔1〕 無知の知

ソクラテスは「あるひとつの知恵」の持主である。このことを彼は否定してはいない。ただ彼は、それが人間なみの知恵ではないという点を強調しているのである。人間の知恵として、様々なものをあげてみる事が出来ようが、そのような知恵とソクラテスの知恵とを比較した場合、ソクラテスの知恵は一体どんな特色をもつものであったと言えるであろうか。

『弁明』に登場するソクラテスは、彼以上の賢者はいないというアポロンの神託に反駁すべく、人々から賢者と思われ、自分でもそう思っている政治家、文芸作家、手工業者を次々に吟味してみたと述べている。この吟味の結果、ソクラテスは彼等に関してそれぞれ次のような結論を得ることになった。

#### ① 政治家の場合

この男も私も、おそらく善美の事柄は何も知らないらしいけれども、この男は、知らないのに、何か知っているように思っているが、私は、知らないから、その通りに、また知らないと思っている。だから、つまりこのちょっとしたことで、私の方が知恵のあることになるらしい。

## ② 文芸作家の場合

作品に関しては、作者たる彼等自身よりも、他の人の方が、もっとよくその意味について語ることが出来るという事実がある。確かに彼等はその作品を作ったが、それは彼等が神がかりになったから作れたのであって、彼等の知恵によってこれを作ったのではないのである。それにもかかわらず、作家として活動しているということによって、彼等は自分が世にも大変な知恵者だと信じこんでいるのだ。この点で彼等は、政治家と同じであるから、私の方がまだましだ。

## ③ 手工業者の場合

彼等は確かに技術上の知恵を有していた。だが彼等は、そのことを根拠に、他の大切な事柄に関しても自分が最高の知者だと考えており、その点で作家と同じ誤りを犯すとともに、その感ちがい<sup>(4)</sup>が彼等の知恵を、おおい<sup>(4)</sup>かかす結果となっている。このような知恵をもつより、私はいまのままの方がよい。

これら三つの結論を鳥瞰してみてもまず気づくことは、ここにあげられている政治家、文芸作家、手工業者は、いずれも世間で言うところの知恵ある人間を代表する人々であり、それ故ここでは、人間の知恵の全体が列挙され吟味される形になっているという点である。吟味の結果、否定的な結論が出された理由は、彼等の知恵はどれも皆「思いちがい」という要素を含んでいるのに、彼等がそのことを自覚していないからであった。「思いちがい」に気づいていないという点については、『弁明』の他の箇所においても、様々な表現で言及されている。

知恵があると思っっているけれども、そうではないのだ(21 D)

自分が知恵ある人間だということを、自分が実際そうでない他の事柄についても、信じこんでいる(22 D)  
一番大切なことを一番そまつにし、つまらないことを不相応に大切にしている(30)

自分にとってはまだ付属物となるだけのものを、決して自分自身に優先して気づかうようなことをしてはならない(36 C)

心を用うべきところに心を用いず、何の値うちもない者なのに、ひとかどの者のように思っている(41 E)

このような「思いがちがい」が、知者と呼ばれる人達の知恵の実体に他ならないとソクラテスは主張しているのである。ここから直ちに、ソクラテスの知恵とは、このような思いがちいを自覚すること、すなわち己れの無知を知ることであるという最初の特色が導き出されることになる。

さて、この「無知の知」は、あまりにも有名であり、時には皮相に解されたりするのであるが、現実の場面においてこの知が展開される場合、それは他の種類の知恵とは異なった次のような新しい性質を帯びることになる。

まず第一に、ソクラテスの知恵は、哲学者の観想的な知恵とは対照的な、実践的性質の強い知恵である。

ソクラテスは様々な人々の知恵を吟味し、無知の自覚を迫り、知恵の出産を促す働きかけを幾度となく繰り返すのであるが、この過程を通じて彼は、人々がこれまでとは異質な人間へと生まれ変わることを期待している。これに対して哲学者の知恵は、事物の原因・根拠を発見し、それによってこの世界が如何に秩序づけられているのかを

観想しようとするものであった。従つてそれは、対象の变革を目指して行なわれる実践とはほとんど無縁のものであった。タレスからデモクリトスに到る幾多の哲学者は、確かに重要な科学上の発見をなし得た。が、今日から見れば重要な意味をもつこれらの科学上の発見や着想も、当時であつては彼等の知的関心を満たすためのものでしかなかった。彼等の知恵は刺激的な遊戯であり、思弁的観想でしかなかったのである。『思ひ出』に登場するソクラテスは、そのような自然の研究が何の現実的効用も生み出し得ない点を槍玉にあげ、自然を研究したら思うがままに雨を降らせたり風を吹かせたり出来るのかと皮肉たつぷりに述べている。<sup>(10)</sup>ソクラテスは、このような自然の研究よりもむしろ現実の人間に働きかけて、人間を变革するということにその知恵を発揮しているのである。このことから、ソクラテスの知恵が哲学者の知恵とは対照的な実践的性質のものであったことがうかがい知れよう。

第二に、ソクラテスの知恵が無知の自覚を迫るものとして發揮される場合、それはあらゆる人々を対象としている。この点でそれは、賢人達の知恵とは対照的な性質をもっている。

賢人達は必然的な運命の法則を感知し、泰然として自らこれに従う知恵の持ち主であり、それ故彼等の知恵は、己れ自身でこれを用いるか、あるいはせいぜいのところ彼等を取り巻きあがめる少数の人々に分かち与えられたにすぎず、その意味でこの知恵は消極的であつた。これに対してソクラテスの場合は、無知の自覚という形で己れ自身に向けられると同時に、この自覚を迫る吟味という形であらゆる種類の人々に対して積極的に向けられているからである。\*

\* ソクラテスの吟味は、全アテナイ人を対象としていた。そしてこの吟味は、人々の知恵をことごとく批

判し切るほどに十分な力を有していた。その力の秘密は、この吟味がアテナイの社会的な虚偽意識を暴露しようとしている点に求めることが出来よう。ペリクレスの追悼演説にも示されているように、アテナイ人は私人であると同時に公人でなければならず、一家の生計をはかると同時に国政を担当せねばならず、一芸に通じるともにあらゆる方面に関して教養をもつことが理想とされた。つまり人々は、ポリス人としての理想的な生き方、美にして善なる生き方を具現した存在（カロカガトス）でなければならなかったのである。しかしながらアテナイの経済的社会的発展は、これを次第に虚偽意識へと変質させていった。ポリス人としての理想的な生き方、つまりポリス人としての「よさ」を一語で表現すれば徳ということになる。人々はポリス人としての徳とは何かを知っていなければならなかったし、事実人々はこれを知っていると思っていた。ソクラテスがまず最初に吟味したのは、この「思いちがい」の部分だったのである。

第三に、教育方法という視点から見た場合、ソクラテスの知恵はソフィストのそれと対照的である。

言論を用いたり、相手方を論破したりする点では、確かに両者は共通する面が多い。だが、ソクラテスの知恵が、産むものを持っている人々に対する助産的な働きかけとして発揮されるのに対して、ソフィストのそれは、一般教養と弁論術の伝達として発揮されている。この点で両者の性質は明らかな対照を示していると言える。

## 〔2〕内から生起した知恵

当時の通念からすれば、知恵なるものは、外から——多くの場合は神から——人間の許にもたらされるものとされていた。だがソクラテスの知恵は、外からではなく、自覚という形をとって、彼の内から生起している。この点にソクラテスの知恵の第二の特色があると言ってよい。<sup>(10)</sup>

外からもたらされる知恵の中でも最高のものは神々の知恵であろう。神々が自らの知恵（もしくはある種の能力）を、特定の人々に恵み与えるという観念は、古代ギリシャのほとんどの文学作品において、広く見いだされる観念である。勿論、その知恵は常に神々の恩恵であるとは限らない。その知恵を人間に与えることによって、神がその人の運命を破局へと導いていくこともあるからである。例えばアスキュロスの『ペルシャの人々』に登場するクセルクセス、あるいはソポクレスの描くオイディプス王はその典型である。これに対して、そのような知恵に与る人間が、神々の意向にかない、神々の意をくむ正しい人である場合、その人は、人生を翻弄する運命の法則を会得した賢人となる。結果がどうなるかは様々である。だがいずれであるにせよ、この種の知恵は、外から、すなわち神々のところから人間の許にもたらされたものなのである。

詩人達の場合も、これと似通った事情の下にある。彼等が詩を作り、これを吟じ得るのは、神（ムウサ）がその業を彼等に授けたからだと考えられていたからである。このことは、オデュッセウスの次のような言葉の示唆するところである。

……この地上にある人間のおよそその中に、うたうと伶人とは

まさに名譽と尊敬とをささげられるべきはずのもの、その訳といえば、

ムウサ芸神が彼らに歌唱の道をお教えなされ、ひい伶人の族をご眷顧なされるからである。

詩人とは言つても、勿論様々様々なタイプの詩人がいた。だが、詩に関する彼等の知恵が、まったく彼等自身の努力の成果であると自負した詩人はいない。つまり彼等の知恵は、何等かの形で外から、すなわち神々のところからもたらされているのである。<sup>(4)</sup>

更に、詩人以外の人々に関しても、やや変容してはいるが、同様の観念が見い出せる。例えば医者<sup>(5)</sup>の知恵がアスクレピオスに由来するとされたり、工芸家のそれがダイダロスに由来するとされるのがこれである。このような例においては、彼等の知恵のルーツは神々にあるが故に、事ある度に神々とのつながりが強調される。しかしながら、特殊な知恵（技術や能力）の持ち主の場合を除けば、神々とのつながりが強く意識されることは少ないし、時代が進むにつれて、このような意識は更に希薄なものになっていく。そして知恵が人から人へと伝達される過程に対しても、神々はほとんど関与しなくなっていくのである。

このような事態が更に一段と進んだ例として、ソフィスト達の場合をあげてもよいであろう。彼等にとっては、徳もしくは弁論術は、どこまでも教授可能なものとして扱われていた。つまりこの種の知恵は、神的な要素を何等ともなっておらず、一定の人間に対して外から人為的にもたらすことの出来るものとなっているのである。

以上のような諸例を念頭におくならば、ソクラテスの知恵が、これらとは全く異なっており、内から自覚として生起しているという特色が一層鮮明なものになるであろう。

ところでここで、ソクラテスがしばしば口にしていた「ダイモンの合図」という問題に言及しておく必要がある。言うまでもなくこれは、ダイモンなる半神からのメッセージであり、外からもたらされてソクラテスの行動を長年



にわたって左右してきたものだからである。

この合図を「意識現象」とか「内なる良心の声」と解する人もいるが、プラトンやクセノポンの著作を素直に読む限り、外からもたらされているという印象を否定することは出来ない。しかしながら、当時のギリシャ人にとつては、このような体験、つまりある種の精神的な力が自分にとりついてきて自分を動かすという体験は、日常茶飯事であつて、決して珍しい事ではなかつた。「ダイモンの合図」に類似したことは、程度の差こそあれ、彼以外の人々においてもしばしば起こり得たからである。この点ではソクラテスもまた当時の普通のギリシャ人の一人であつたにすぎない。しかしながら、このような事情を念頭においたとき、本来ならばこの「ダイモンの合図」がおそらく彼の場合には特に強く意識されたであろうこの合図が——ソクラテスの知恵の主たる要素となつてしるべきであつたのに、そうはならなかつたという点がきわめて重要である。『弁明』に登場するソクラテスは、この合図は、自分が何かをしようとしている時に一種の声となつてあらわれてこれを止めさせるが、何かをなせと勧めるところはどんな場合にもなかつたと述べている。ここに示されているように、この合図は諫止として現われたにすぎず、何等かの知恵を伝達しているわけではないのである。\*

\* 諫止の結果、ソクラテスの探究する知恵の方面（分野）が限定されるということもあり得たであらう。その意味では、ダイモンの諫止は、無知を自覚する際の契機になつたということも考えられる。だが、そのように限定された方面（分野）で、どのような知恵をどのようにして求めていくかは、ソクラテスの主体的な努力にゆだねられているのである。諫止それ自体は、外から何の知恵ももたらしてはいない。このことだけは、明らかである。

「ダイモンの合図」に関して、以上の点が明らかになれば十分である。そしてこの点からも、ソクラテスの知恵が自覚として内から生起したものであるということがますます明らかになるであろう。\*

\* 『テアイテトス』の中でソクラテスは「僕は知恵を産めない者なのだ。……僕は取り上げ役の方をしなければならぬように神が定め給うているのだ。そして生むことはしないようにこれを封じてしまわれたのだ」と語っている。この言葉は、知恵が内から生起したということを否定しているようにとれる。しかしながらこの言葉は、歴史的な状況の中で発せられた彼一流のイロニーであった。この点については後で取り上げる。

### 〔3〕生き方についての知恵

当時の通念からすれば、知恵とはほぼ何等かの外的対象に関するところのものであった。これに対して、自己の内から生起したソクラテスの知恵は、自己の生き方そのものに関する知恵——一人一人の人間が、自己の生き方に関してもつところの知恵——であるという第三の特色をもっている。

ソクラテスが人々に説いたことは、知恵を愛し求めるような生き方をするからこそが最も大切だということであった。このことは「徳に留意せよ」とも「魂の世話をしてそれが出来るだけ善いものとなるように配慮せよ」とも言い直されているのであるが、このような言葉でもって表現されるころの知恵は、既に見たように、これまでのどんな知恵とも異なっていた。またそれは、当時の人々にきわめて強い衝撃を与えるものであった。なぜならこの知恵に触れた人々は、はじめて自分達の生き方そのものに対して根源的な反省を迫られることとなったからであ

る。例えばソクラテスの知恵に触れたニキアスは、この点に関して次のように述べている。

……誰でもあまりソクラテスに近づいて話をしていますと、はじめは何か他のことから話し出したとしても、彼の言葉にずっとひっぱりまわされて、しまいには必ず話がその人自身のことになり、現在どのような生き方をしているのか、また今までにどのように生きてきたか、を言わせられるはめになるのです。さていったんそうなると、その人の言ったことを何もかもきちんと吟味してしまふまで、ソクラテスは離してくれないでしょう。——中略——こういう言い方をしますのも、つまりリュシマコス、私はこの人とつきあうのが楽しく、我々の今までにしたことであれ今していることであれ、それが立派な仕方ではない、ということに気づかされることは、すこしも悪いことではないと思うのです。

生き方に関するこのような反省を、やや広い視点から見直してみると、この反省はほぼ次のような二つの転機を経て喚起されていることがわかる。その一つは、外的で世俗的なものに対して向けられていた関心を、魂の方へと向けかえることである。このことは、具体的には、金銭、名誉、評判、地位、健康、身体などに対して向けられていた関心を、魂の方へ、すなわち自分の生き方そのものへと向けかえることを意味している。この向けかえは、無知の自覚という地点に到って一段落することになる。その二は——先に示したニキアスの言葉には示されていないが——知恵を受けるといふ客体的な立場から、これを自分で産み出すといふ主体的な立場への転換である。このこ

とは、言葉の新しい定義を見出したり、学問上の発見をしたりすることではない。むしろこのことは、自分で自分の生き方を決定していけるようになること、つまり、自分の生き方を、他のものの指示によってではなく、自身で主体的に決定していけるような知恵を産み出すということなのである。\*

\* ダイモンの合図は、ソクラテスの行動に対する他からの介入である。一方でこのような介入を許容しつつ、他方で彼が自分の生き方を主体的に決定していく知恵を追求していたというのは、確かに矛盾である。だが、これを矛盾と考えるのは我々現代人の感覚であろう。種々の神秘的な力が自分に取りついて自分を動かしているという考えに深く親しんでいた当時において、自分の生き方を主体的に決定する知恵が問題になったということは、きわめて重要な特筆すべき事柄なのである。

自分の生き方を主体的に決定していく知恵とは、これを自分で産み、自分で養い育てなければ自分のもとはならない。ソクラテスが産婆役に専念せねばならなかった理由は、原理的にはこの点に求められよう。

以上のような二つの転機を経て、生き方そのものに対する知恵が産産されるわけであるが、その際重要なことは、この知恵は、観念の中で成立する抽象的な知恵ではなく、アテナイで現に生活しているポリス人の具体的な知恵であったという点である。

当時のアテナイは病んでいた。少なくとも二つの歴史的課題に直面していた。文化的・経済的發展の結果、伝統的な価値観は堅牢さを失い、ポリス人であると同時に一人の人間として存在するということに様々な矛盾が感じられるようになっていった。また、私的欲望のうずまく帝国主義的な国家へと変質しつつあったこのポリスにおい

て、有徳で善良なポリス人として生きようとするれば、人はどこかで自己欺瞞を犯さねばならなかった。ニキアスの言葉に示されているような、生き方そのものに対する反省は、このような現実問題を背景にしているのである。

このような背景を念頭においた上で言うならば、ソクラテスが愛し求めよと説き続けた知恵とは、自己欺瞞を自覚し、無知を自覚した上で、ポリス人として生きるべき方向を主体的に決定する具体的で現実的な知恵ということになる。勿論この知恵は、ポリス人の生き方という枠組を超えた普遍的な意味をもっている。そうであるからこそこの知恵は、各々の時代の制約下に生きる人間が、その制約を担いつつも、自らの知的判断を一貫させる形で如何に生きるかを決定していく知恵として展開されていったのである。

## 結 語

古代ギリシヤ人の理解していた知恵とは、どのような基本的特色をもつものであったか。そしてこれらの様々なタイプの知恵と比較した場合に、ソクラテスの知恵は一体どのような基本的特色をもっていたか。

まず第一に賢人達の知恵は、究極的には運命にかかわる知恵であった。知らぬ間に自分達をあやつり動かす運命の定めに対して、人間はあまりにも無知であり無力であったが、少なくとも悪しき境遇に落ち込まぬような手段を講ずることは出来た。すなわち賢人達は、神々のねたみを招かぬ範囲内で、未来を予見し、様々な配慮をしたのである。その上で彼等は、与えられた運命を泰然自若として生きぬいた。賢人達の知恵は、このような形で発揮され

たのである。

第二に、哲学者の知恵は外的対象に関係している。人間（自分自身）が問題になる場合でも、それは自分から離れたある外的対象として措定されたのである。この知恵は、任意の事象が如何なる原因・根拠によって生じるのかを説明する知識体系として発展した。

第三に、ソフィスト達の知恵は、人々を動かし支配するプラグマティックな知恵であった。

最後に、ソクラテスの知恵は、人間一人一人の生き方に深く関係している。それは自らの生き方を主体的に決定し得るための知恵なのである。その意味でこれを自己決定知と呼ぶことが出来よう。

人間は、我身にふりかかってくる障害や課題や試練を乗り越えて自己成長をとげていく。だが、この人間は一体何を、またどこを目指して生きているのか。それは彼自身にも定かではない。自分は何を目指すのか、何のために生きるのか、何故そうするのかといった問いを重ねていったとき、人間は自己について無知であったことを告白せざるを得ない。ソクラテスの自己決定知は、このような次元において生起する知恵なのである。

#### 注

- (1) Sym. 219 E—221.
- (2) Sym. 221 E—222.
- (3) Protagoras 317 D—E.
- (4) A. E. Taylor "Socrates", p. 84.
- (5) Apol. 18 B.

- (6) Apol. 20 D—E.  
 (7) Prot. 313 C.  
 (8) Gorgias 462 E—  
 Phaedo 96 C.  
 (9) Mem. I. 1. 11~15.  
 (10) Apol. 19 C.  
 (11) Teetetis 133 E.  
 (12) Meno 81.  
 (13) Sym. 201D.  
 (14) Apol. 41 B—C.  
 (15) Euthyphro 6 B.  
 (16) Apol. 21 C—22 E.  
 (17) Mem. I. 1. 15.  
 (18) この点に関してE・R・ドッズは、「ソクラテスにとっては、アレテーは学問的知識の一つとしてのエピステーメーであるか、または、そうでなければならぬのである」とした上で、「ソクラテスにとって、アレテーは内部から外へと出てくる何かであった。それは習慣づけによって獲得される一揃いの行動パターンではなくて、人間の生の本性と意味についての確固たる洞察から生まれてくる、首尾一貫した物の見方であった」と論じている。『The Greeks and the Irrational. p. 184. 1951. Univ. of California Press.』
- (20) 『オデュッセイア』第八書、480行、呉茂一訳、岩波。
- (21) この点に関してはB・スネルが注目される。スネルは、ホメロスからヘシオドスを経てクセノパネスに到る過程で、知恵や知識や能力の主体は、神ではなく人間であるという観念が成長してきたことについて論じている。『精神の発見』第八章 創文社。
- (22) シャン・ブラン『ソクラテス』p. 85 有田潤訳、白水社
- (23) Apol. 31 D. (本学助教授・教育学)